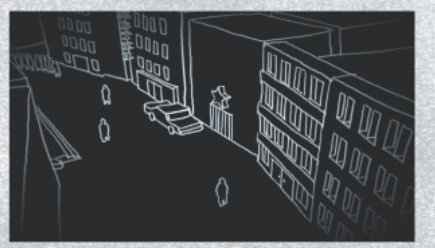


誰に言えるんだ？／この世界が
悪い方向へ／向かっているなんて

これまでに発表された画ニメの中でいちばんの異色作がこの『Highway Jenny』だ。

一見して気がつくのが、画ニメという名前の由来である「画」について、他の作品とはだいぶ異なったつくりになっていることだ。

画ニメの「画」はアニメのように動かないことを前提にした「画」であった。しかし本作では、モノクロームの画面の中、アニメーションと変わらないスピードで動く「画」を観ることができる。とはいえアニメーションにはない、ある種の「画」の落ち着きは、今作が画ニメたる所以をも感じさせてくれる。

確かに、浅井健一の曲の疾走感を表すには一枚画では物足りなさが残る。オープニングの場面で、浅井健一のギターのイントロに乗せて描かれる景色は、物語の導入としてすぐれて効果的だ。そこにかぶさる、スプレーで壁に書かれた落書きのような英語テキストからは、諦念と、その中から立ち現れる一片の希望が感じられる。

『Highway Jenny』はジェニーという少年の物語だ。冒頭、電車から街に降り立ったジェニーは、何度もあくびをする。しごく退屈そうだ。退屈のあまり地面に自分の名前を刻みはじめるジェニー。「BAR SIBERIA」という盛り場の看板も見えるが、そうした大人の退廃ともジェニーはまだ無縁だ。この街には少年の気を引くものはない。

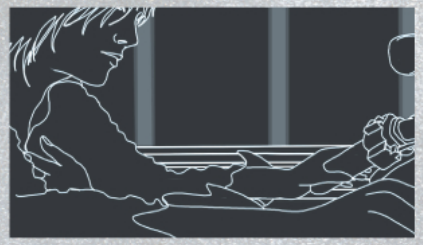
ただ1人の少女を除いては。

少女の名はシェリー。物語中にはもちろん2人が愛しあう場面も出てくるが、それはたいした問題ではない。少年と少女の愛の行為は、性急で無邪気で欲がない。

街中でもう1つジェニーの目をひいたのは、「JOB」という表示板のもとに並ぶ若者達の姿だった。長蛇の列の先にあるのは職業安定所か、はたまたそれと見せかけた徴兵所か。不穏な空気はすでに流れている。

胚、蝶、十字架、象徴的な絵がいくつか続いて、唐突に現れるジェニーは椅子に腰掛けている。だがその椅子は突然、梯子をはずされるかのように消えてしまう。ジェニーはどうなったのか？

答えは続いて現れる戦場の場面が教えてくれる。ライフルを抱えて、土嚢の裏に座り込むジェニー。次々と飛来する戦闘機。茫然とした表情で倒れていくジェニー。飛んでくるヘリコプター。アメリカ国旗……。なぜジェニーは死なねばならなかったのか？

戦争は決して遠い昔の話ではない。現在でも、中東地域では日常的に自爆テロや民族紛争が行われている。アメリカを襲った9.11の悲劇は、憎しみの連鎖となって未だに世界を覆っている。ベトナム戦争をも湾岸戦争をも思わせる映像は、決して特定の戦場を模写したものではない。だがジェニーの生きている世界では、それが現実だ。

そしてもちろん、ジェニーは君であったのかもしれない。